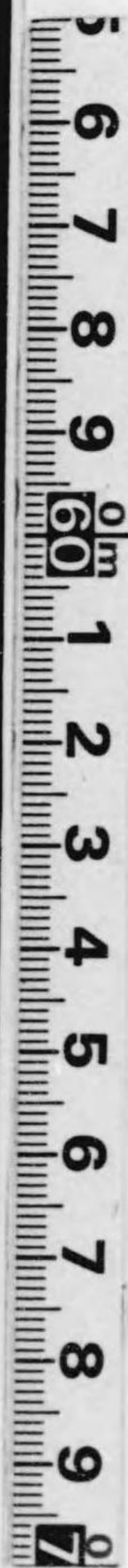


337

306



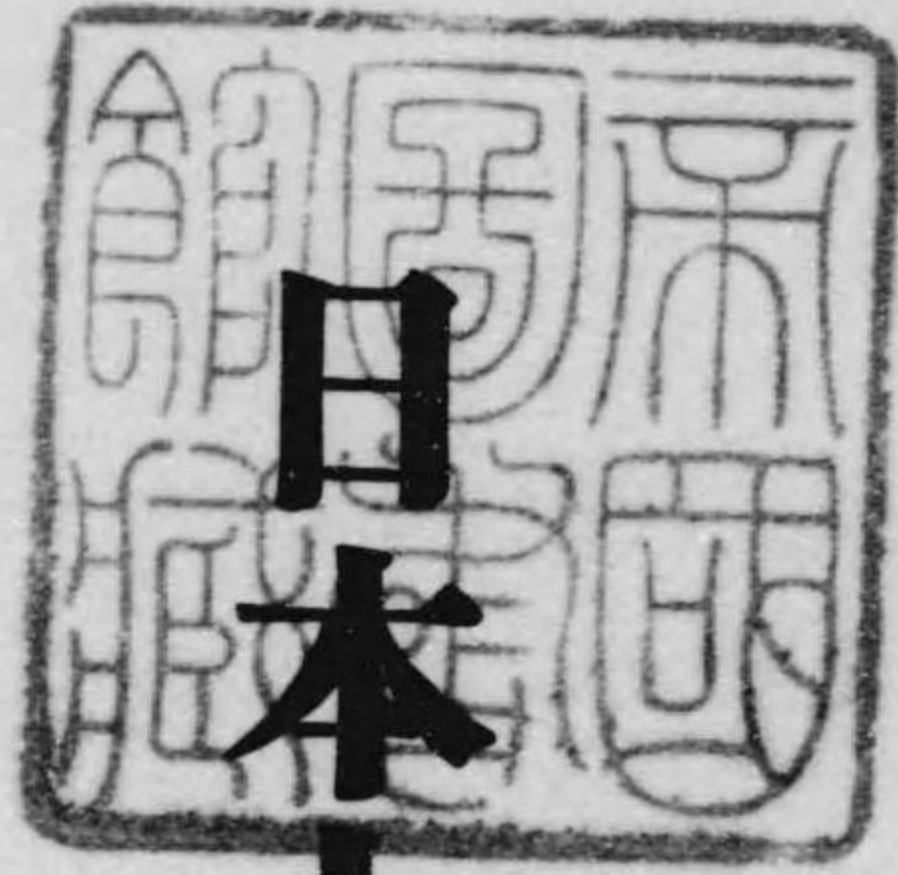
始



H-877-46

日本人の坐り方に就て

337-206



日本人の坐り方に就て

醫學博士 入澤達吉述

大正
10 4.16
内交





緒言

此一篇は、予が、大正八年十月三十日、第四十一回學術講演會に於て、演說せるもの、筆記にして、翌九年八月十日發行の史學雜誌第三十一編第八號に掲載せられたるものなり。今少しく之に修正を加へ、數多の圖畫を添附し、單行本として再刊するこゝこなせり。

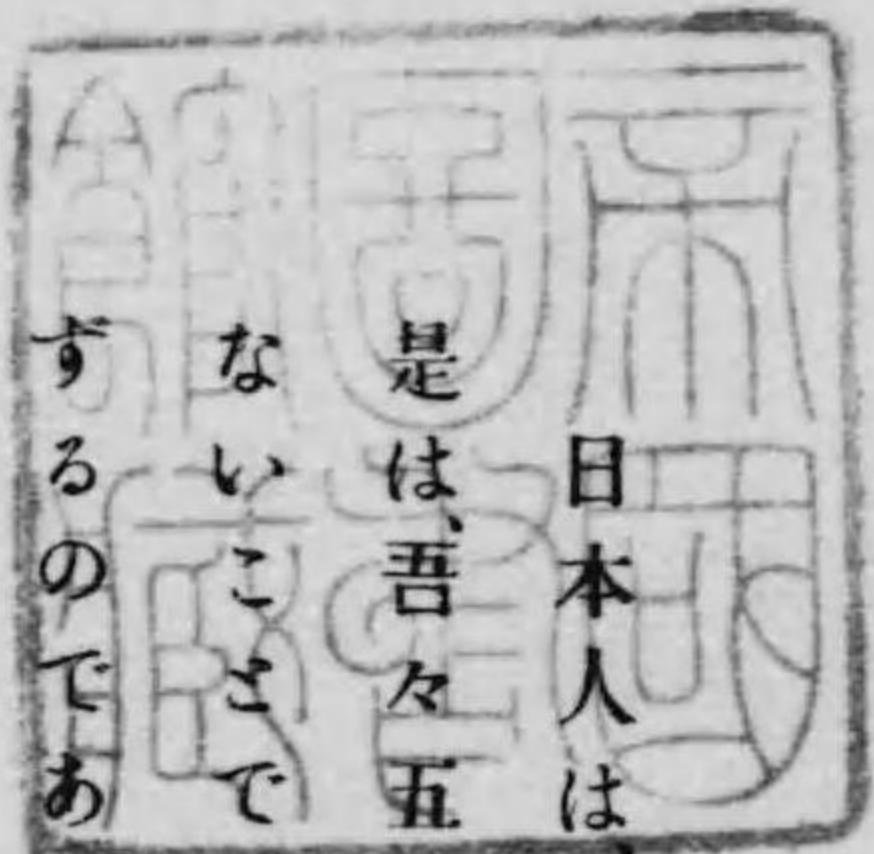
本書の刊行に際し、文學士中村孝也氏の、多大の盡力を辱うしたるこゝこを、爰に謹謝す。

大正十年三月下浣

著者識

日本人の坐り方に就て

醫學博士 入澤達吉



日本人は日常家庭に居る時には、膝を曲げて、疊の上に正しく坐つて居る。是は、吾々五千萬の同胞に取つては、普通一般のことであつて、何等不思議もないことであり、ますけれども、初めて見た外國人などは、頗る之を奇異に感ずるのであつて、世界の珍風俗の一に算へられる位であります。例へば、彼の支那の婦人が、足を小さくする爲に、纏足をする、或は印度人が、鼻飾をする、鼻に「ダイヤモンド」や、其他の寶石を嵌めて飾をする、或は又、南洋の土人が、耳朵に太い棒を通して、耳飾として居る。是等の風俗も、其の國の人に取つては、普通のことで、寧ろ之をしない方が、變に思はれる位であるが、他の國の人から見れば、甚だ妙に感ぜられるのであります。其様に、吾々が現今の如く、

疊の上にキチンと坐つて居ると云ふことも、自分達としては、何とも思はないが、外國の人からは餘程不思議の風俗として見られるのであります。

之に就て、日本人以外の人種の坐り方を、一寸觀察致しますると、先づ一番近い所で、新版圖の朝鮮の人は、どう云ふ風の坐り方をして居るか云ふこと、之に就ては、後に澤山繪を御覽に入れやうと思ひますが、日本人とは全く違つて居ります。又日本の本土の古い住民であつた所の「アイヌ」人にしても、矢張り吾々のやうな坐り方はせない。又吾々日本人が昔から交通して居た所の支那人は、どうか云ふに、この支那人も、矢張り吾々のやうな坐り方はせない。尙印度人にしても、波斯人にしても、吾々のやうな坐り方ではない。歐羅巴人が日本人の如くに坐らないと云ふことは、皆さんも御承知のことでありませう。其他亞米利加印度人、或は亞弗利加の土人等にしても、吾々のやうな工合の坐り方ではない。日本人のやうな坐り方は、世界何れの國にも、見ることが出來ないのであります。

そこで、私は、此の日本人の坐り方に就て、此處で一言解説を致して置きた

いと思ひます。實は是は少し蛇足のやうでありますけれども、人間の足のことで、すから蛇足ではない(笑聲起る)と云ふのは、此先き二百年なり、三百年なり、經つた後の世の人が、大正年間に、入澤と云ふ男があつて、坐り方の話をしたけれども、其時代の坐り方は、こんな風であつたらうかと言つて、解らなくなつても困りますから、一通り申述べますが、今日の吾々の坐り方は、左右共、膝の關節を極度まで曲げ、即ち膝から下の下腿と、膝から上の大腿とを、チヤンと折り重ね、腓腸は大腿の裏に密着するやうにし、足首の關節は極度に伸展して、足背は向脛と一平面になるやうにし、即ち足の甲は向脛と共に、疊或は床にピッタリ附着させ、兩方の跟と足蹠の内側とにて、臀を支へ、身體の重點が、其處に落つるやうな工合に坐るのであります。尙足の一番太い指を第一趾と申しますが、左の第一趾の内側と、右の第一趾の内側とが、互に接着するやうにして坐る、或は左右第一趾が、重り合ふやうにして坐ることもあります。私は隨分諸方へ行つて、教を請ふて來たのであります。元來坐り方には、眞と行と草とありまして、今私の申しましたのは、坐り方の一番正

しい、即ち眞の坐り方であります。文字で言ふと、楷書であります。是は私
などには、甚だ迷惑の坐り方ではありますが、然し行儀の良い人は、此の通り、長
時間、チャント坐つて居るのであります。これが即ち今日の日本の正しい
坐り方となつて居ります。

然らば、斯かる日本人特有の坐り方、即ち所謂日本流の坐り方と云ふもの
は、日本民族に、古來行はれたものであるか、ごうか、それを知りたいと思つて、
色々取調べて見ましたが、私の知識の及ぶ限り調べました所に依りますと、
日本人は昔から此様に坐つたものではない。吾々日本人が、日常此様な坐
り方をするやうになつたのは、比較的新しい習慣であるやうに思はれます。
それなら、何時の時代頃から、斯う云ふ風の坐り方になつたか、と申します
と、是は今日遺つて居る所の繪畫や、彫刻物などに就て調べるの外はないの
であります。それに就ては、後に聊か私の調べました所を申し上げます。其
前に申し上げたいことは、此の「坐る」と云ふ言葉です。坐ると云ふことは、廣い
意味で申しますと、「立つ」と云ふことの反對の意味であります。であるから

して、立つ以外に寝るのは又別ですが、寝るまでの間の體位は、皆坐ると云ふ
範圍に屬するのだらうと思ひます。即ち坐ると云ふことは、人間あつてか
ら以來、必ずあつたことと考へられます。古書を調べて見まするに、孝經に
「仲尼問居、曾子侍坐」と云ふことがありますが、恐らく曾子は坐つて居たに
違ひない。ごう云ふ風の坐り方をしたか、それは別問題として、兎に角坐つ
て居つた。即ち支那の昔に於ても、坐ると云ふことの行はれたことは、明か
であります。支那人が椅子に凭ると云ふことは、是は後の世に起つたこと
であつて、昔は少くとも、一般の民衆は、椅子には凭つて居らなかつた。それ
は何時からと云ふことは、問題外になりますから省きます。

其他、支那の書物で、皆さん御承知の、莊子の齊物篇に「南郭子綦、隱几而坐」と
云ふことがあります。是も几と云ふのは、何んなものかと思つて或る方に
質しました所が、それは、肘掛のやうな物である。其肘掛のやうな物に凭れ
て居つたのであると云ふことで、而も其時の南郭子綦の凭つた肘掛の高さ
は、凡何寸だと云ふこと迄も、教へて呉れました。兎に角肘掛に凭れて坐し

て居つたであります。最も古いものでは、支那後漢時代の繪で、今日遺つて居るものがあります。例へば山東省にある所の孝堂山の畫像、或は同じく山東省にある所の武梁祠の石室に彫つてある所の畫像などには、春秋戰國時代の人物が澤山彫つてある。是は後漢時代に出來たものでありまして、今日遺つて居る所の畫としては、最も古いのであります。其中に、矢張り戰國時代の人物で、曾子とか、閔子騫とか云ふ人物が、一種の坐り方をして居る。之に私が跪と云ふ名を付けました。私が名けたのではありませんが、私の分類に依つて跪と云ふ方に入れたのです。其外周の文王や、齊の桓公とか云ふ人間が、胡坐をかいて居る。文王は天子様であるが、胡坐をかいて居る圖がある。中には椅子に腰掛けて居る者も其時分に描いてあります。

其他に支那の書物で、先頃私が病氣で臥して居た際に、偶然讀んだのは、文天祥正氣歌に「爲張睢陽齒、爲顏常山舌、或爲遼東帽、清操厲冰雪」と云ふ句があります。此の中の「遼東帽」と云ふのは、後漢の管寧と云ふ人のことでありまして、この管寧と云ふ人は、長い間遼東に來て居つたのであります。此人が、



父其卜寡子閔
像畫ノ室石祠梁武漢



像畫山堂孝漢



(左)沫曹卜(右)公桓ノ齊
像畫ノ室石祠梁武漢



像畫山堂孝漢



(左)嬪太卜(右)王文
像畫ノ室石祠梁武漢



母其卜子曾
像畫ノ室石祠梁武漢

私は日本流の坐り方をして居たものと思ふのであります。云ふのは、此人は嘗て足を投出したことがない、五十年間、木の腰掛のやうな物の上に坐つて居つた、其爲に、膝の當る所に、穴が掘れたと云ふことが書いてあります。之に依つて、私は日本流に坐つたと思ふのであつて、日本流でなければ、膝の當る所に、穴が掘れることはありません。何故さう云ふことが書いてあるかと云ふと、詰り此の人だけは、人と異つた獨特の坐り方をしたからであると思ひます。従つて、又日本流に坐ることも、昔から無いではないと云ふことの例證にもなると思ひます。

扱昔の貴族だの、家長などは、多くは胡坐をかいて居つたもので、即ち先刻申しました齊の桓公、周の文王などは、胡坐をかいて居り、其の側に侍つて用を達す人は、日本流に坐つて居つたのである。是れは其處にある煙草盆を取れどか、何をしろ、彼をしろと命ぜられた時に、直ぐに起つのに都合が好いから、日本流に坐つたものであらうと思ひます。尤もそれは起つことに、便利な姿勢を取る爲であるから、本來は「跪」と云ふ姿勢を取つて居つたのであ

りませうけれども、長時間になると、跪いてばかり居られないから、そこで、ツイ腰を下ろしてしまふと、それが即ち日本流の坐り方になるのでありませう。

私は説明の便宜上、假りに跪の姿勢を三通りに區別し、跪の一、跪の二、跪の三と云ふ名を付けます。即ち跪の一は、頭より膝迄を一直線に伸ばし、膝をば直角に折り、膝から下の脚、即ち下腿と足の甲は、丁度日本流に坐る時の如く、平に床に密接するやうにするのであつて、是は人を尊敬する場合の姿勢であります。此の跪くと云ふ言葉は、膝を曲げ衝くと云ふ意から來たのださうでありまして、之を跪坐とも申します。尙支那には、跪諷と云ふ言葉があり、御經などを讀むのに、跪諷したと云ふやうな事がある。それは今のやうな姿勢で經を讀むのであります。跪の二は、日本流の坐り方と同じ様で、兩膝は地に着けるが、足の甲は地に着けないで、兩方の跟で臀を支へ、兩足の趾は残らず足の甲の方に曲げて地に着け、それで、全身を支へるのであります。故に若し後方から覗けば、其人の足趾が全部見えるやうな恰好にな

るのであります。「跪の三」は、俗に謂ふ蹲むと云ふ坐位で、是は膝は折りますけれども、兩方の膝頭は胸の所に來、太腿の後側と下腿の腓腸の所とは相觸接する。さうして跟と足の趾とは、共に平に床に着いて居る所の坐り方である。即ち此の姿勢に於ては、太腿の前面の方は、自然に腹部に觸接するやうになるのであります。で此の跪の二、及三は、佛教の方で申します蹲踞の位置で、目上の人に對する最敬禮であり、又受戒の時の禮式ともなつて居る。宗旨の種類に依て、或は形は多少異つて居りますけれども、跪の二、及三は共に「うづくまる」と云ふ形であります。又或る解釋に依ると、蹲踞と跪床とは、膝を地に着けると膝を地に着けないとで區別して居るやうにも聞及んで居ります。併し是は必しも何れの場合にも、さう云ふ區別した意味で用ゐられて居ると思はれませぬ。

此の外、佛教徒に限る坐法としては、例の「結跏趺坐」と云ふことです。是は臀を床に着け、左右の足を曲げて、互に一方の足を、他の方の側の太腿に載せて坐るのであります。其時は自然に、兩方の足趾は、水平になつて上向にな

る。是が所謂坐禪の時の坐り方であります。或は又片足だけを他の側の太腿の上に載せ、一方は足の下へ入れて置く云ふ坐り方もある、之を佛教の方では「半跏趺坐」と申します。是等は佛教徒のみの坐法で、普通の人は斯う云ふ坐り方は致しません。

坐る云ふことは、前にも申しました如く、元來立つ云ふことの反對の



武裝男子埴輪土偶「アグラ」の
常陸地方にて祠にあらもるの
奈真朝以前のものなりといふ
(大野雲外氏贈)

方は「アグラ」をかくことである。日本でも、昔の坐り方は皆「アグラ」であつたやうに見えます。此の「アグラ」云ふのは、元來は、天子様の御坐りになる御臺の名であります。左れば古い書物には「阿久良」又は「阿娑羅」云ふやうな字も書いてあります。之を漢譯して「胡床」か、或は「吳床」なご云ふ字も用

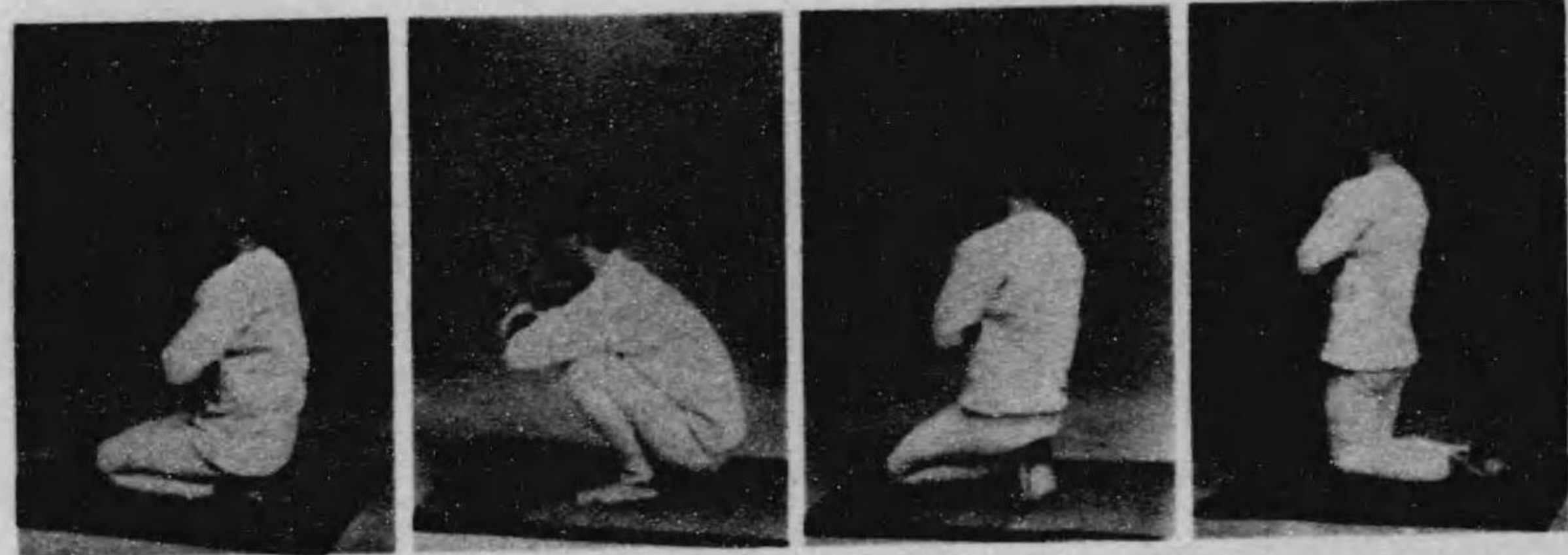
ゐられて居ります。又椅子とか、床几とか云ふやうなものまでも、皆阿久良云ふ中に數へてある。後に其意味が轉じて、脛を打違へて坐ることが、阿久良云ふことになつたのであります。兎に角、昔は、一般の民衆が、平生家に居る時には「アグラ」をかいて居つたのであるけれども、長上の人に對して、敬意を表するか、特に或る禮拜の時、禮式の時などには、一時暫く、今日吾々のやつて居るやうな、日本流の坐り方をしたものとやうに思はれるのであります。

併ながら、普通の「アグラ」の外にも、また色々な坐り方があつて、普通家に居る時には、或は足を投出して居つた者もあつたらうと思はれる。即ち所謂「ナゲアシ」云ふ坐法もあります。支那では、之を「箕股」或は「箕踞」も申します。此の「ナゲアシ」も、甚だ工合の好いことがあるから、さうして居つたに違ひない。王維の詩に、「科頭箕踞長松下、白眼看他世上人」云ふ句があります。是は松の下に足を投出して居つた云ふ意味で、説文には「伸兩脚而坐曰箕踞」云ふ説明が付いて居ります。又論語の憲問篇に「原壤夷俟、子曰、幼而

不孫弟、長而無述焉、老而不死、是爲賊、以杖叩其脛、云云云云である。是は原壤云云人が「ナゲアシ」をして居つた爲に、孔子様に毆られたのであつて、日本流に坐つて居つたら、孔子様でも突然來て、脛をなぐる譯には行かない。夷云云字は「ナゲアシ」をして居ると云ふことださうであります。

又立膝云云坐法もある。是は「アグラ」に似寄つたものである。或は片膝が立膝になつて、他の片膝は「アグラ」のやうな工合に、立膝云云「アグラ」の半のものもある。柿本人麿が坐つて居るのは、斯う云ふ坐り方で、即ち「歌膝」云云のは此類と思ひます。何時も、私の見る柿本人麿の像は、何か衣物を着て居つて、裸體の人麿は見たことがありませんが、ごうも歌膝云云のは、斯う云ふ坐り方のやうに思はれます。

其外、昔の坐り方には、兩方の足の蹠を合せて坐つて居るのがあります。歴史の繪などを御覽になると、昔の高貴の人は、衣冠束帶して、皆さう云ふ風に坐つて居る。是は、一種の「アグラ」のやうなものですけれごも、是には「樂坐」云云名が付いて居ります。それは、昔、音樂を奏する時に、身體が動搖する

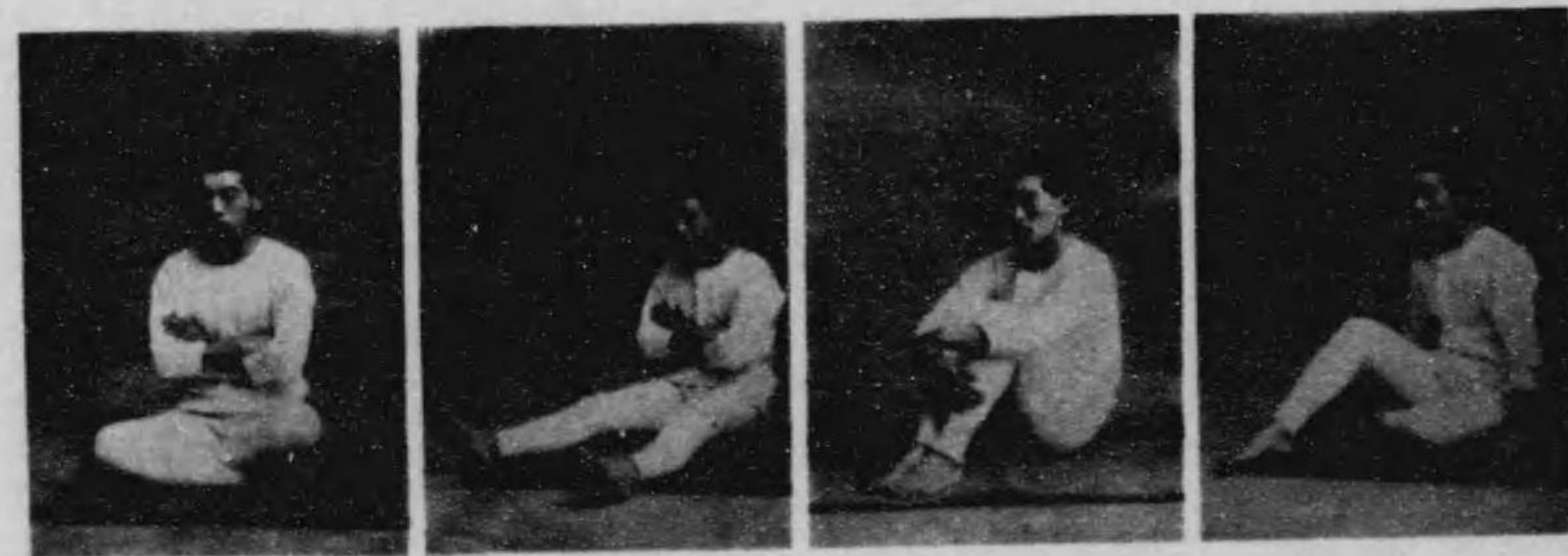


眞ノ坐位
今日ノ日本ノハス方

一ノ跪 二ノ跪 三ノ跪



割坐 樂坐 半跏 結跏趺坐



アグラ 箕踞 立膝 歌膝

種々ノ坐方

こいけないから、動搖をしない爲に、斯う云ふ坐り方をしたので、此の坐り方は、身體が動搖しないのみならず、見好くもあるから、従つて高貴の人が正坐する時には、樂坐をやつたものと思はれます。即ち後世は、樂坐と云ふものは、音樂の時ばかりでなしに、儀式の時の坐法にもなつたと云ふことであります。

尙此の外にまだ、日本流の坐り方の少しく變態なのがあります。それは、茶人の間に行はれて居る所の「割坐」と云ふ坐法でありまして、此の割坐と云ふ坐り方は、兩膝を曲げて、坐ることは普通の日本流の坐り方と同じでありますけれども、兩方の足部を太腿の外側に出して、即ち兩側の内踝が、太腿の外側に接し、さうして、臀は直接に牀に着いて居る坐り方です。是は普通では行儀の良くない女などが――女に限つたこともないけれども、能く斯う云ふ風に坐ることがあります。併し茶人の方では、之を割坐と言つて、一の坐法になつて居ります。又昔の貴族の坐り方に「龜居」と云ふのがあります。此の龜居と云ふのは、龜の足のやうに、足が兩方に、横に出て居るから、斯う云

ふ名が付いたのであつて、割坐と云ふの略は同じことと思はれます。少くとも類似して居る。或る國にては、之を「薦ずはり」とも申しますさうであります。何れにしても、今日では、行儀の良い坐り方ではありません。又昔



朝 鮮 の 婦 人

は、貴人の前に出る時に、左の膝を立て、右の膝を伏せて坐つたと云ふこともあります。即ちさう云ふ風の禮式の坐り方もあつたのであります。

そこで日本人は、何時頃からして、家居平常今日の如き坐り方をしたか云ふことは、色々調べて見ましたが、どうも明瞭には分りません。けれども、ずっと古い昔から、今日の如き坐り方が、一般の習俗でなかつたと云ふことだけは、斷言し得ることと思ひます。或る日本人の著述に、本邦人は實に二千年來此の居坐(日本流の坐り方)を以て、作法と爲したるが爲に、其下肢の發育を妨げ、又骨に彎曲を來し、仍て其長さを短縮したり云々と云ふことが書いてありますが、是は甚だしき間

違ひであります。其ことは後に申しませう。勿論、今日の如き日本流の坐法を、或場合に爲したと云ふことは、先刻申しました文天祥正氣の歌の中に



埃 及 の 人 の 坐 方

(巴里博物館陳列品、塚本靖氏寫)

ある話と同じことで、支那に於てのみならず、日本に於ても、昔からあつたことは確かである。日本でも、今日の如く、昔に於ても、坐つたと云ふことがあると云ふ例を、御覽に入れる爲に、此處に色々の物を持つて参りました。法隆寺の五重の塔にある像の内に、日本流に坐つて居る像が數多あります。上野の博物館にも、其模形が置いてあります。其他京都の大原の三千院の極樂院にある、觀音菩薩の像、勢至菩薩の像、是は惠心僧都が作つたと言はれて居るものですが、何れも坐つて居る像です。即ち觀音菩薩及勢至菩薩が、日本流に行儀よく坐つて居ります。私は今年の春大原に行つて見て参りました。

其他、古代の埃及にも、さう云ふ風に、日本流に坐つて居る繪があり、希臘の



回教徒禮拜の圖

脚の上に載つて居る。左の脚は、膝の折り方などは、同じけれど、坐つて居るとき、體の外の方に少し離れて居る。即ち左の脚には、體が載つて居ない。其のみならず、左の足の趾は、皆爪立つて居る。だから、背面から覗くと、左の足趾だけは、見えるやうに坐るのである。西洋人でも、お寺へ行くとき、椅子の

繪にも、それがあります。又其他の民族に於ても、或る場合に、一時、此の日本流の坐り方をするといふことは、確かにあるのである。現に「マホメツト」教の人が、メツカの方を向いて、禮拜する時には、日本流の坐り方をやつて居るのであります。然し嚴重に云ふと、マホメツト」教徒の禮拜の時の坐り方は、日本の坐り方に似て居るけれども、少し違つて居る。即ち體が重もに、右の



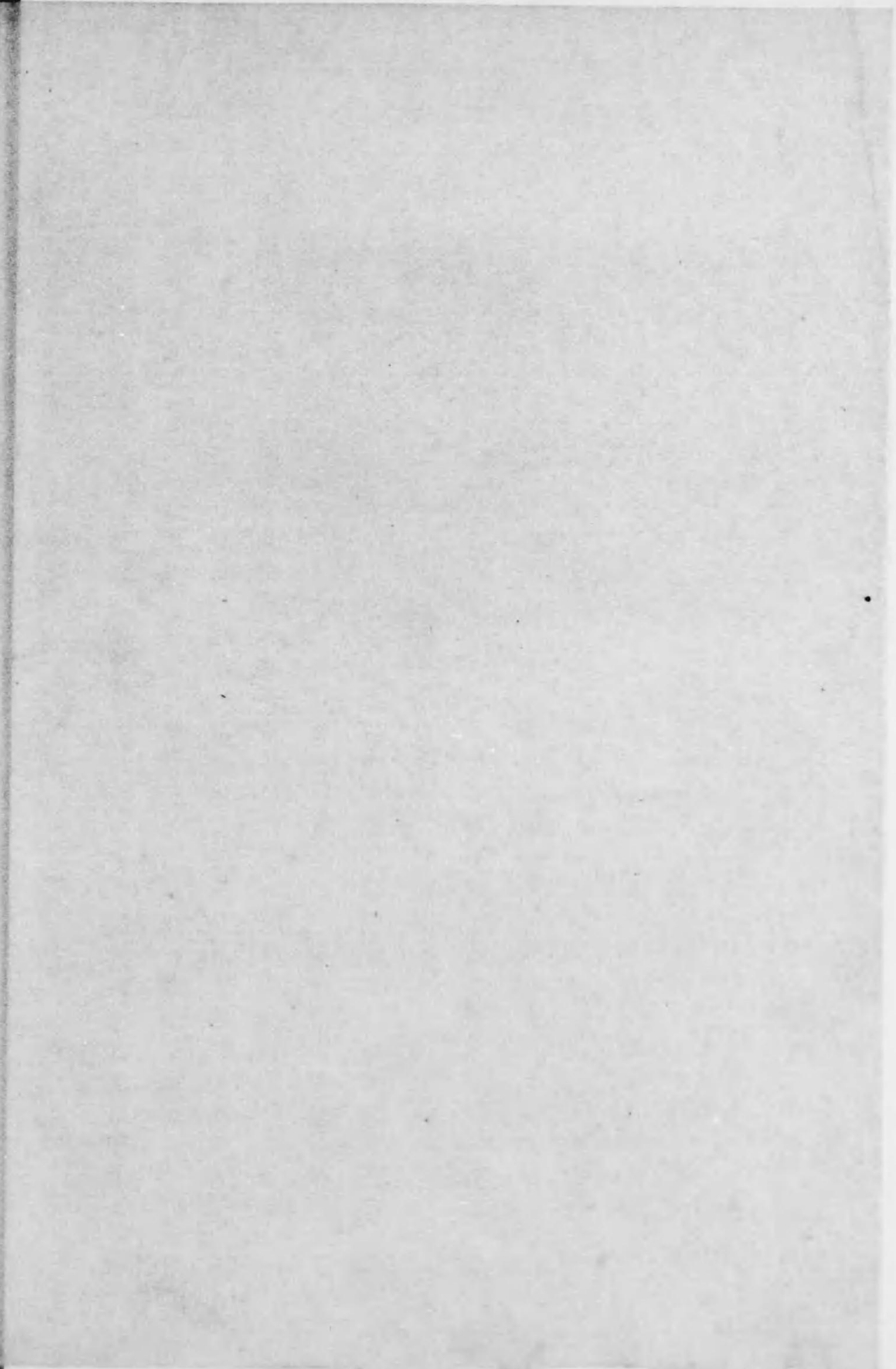
像塑の内塔重五寺隆法



像坐薩菩普世觀
院樂極内院千三原大



像塑の内塔重五寺隆法





茶喫の人シタスキルト



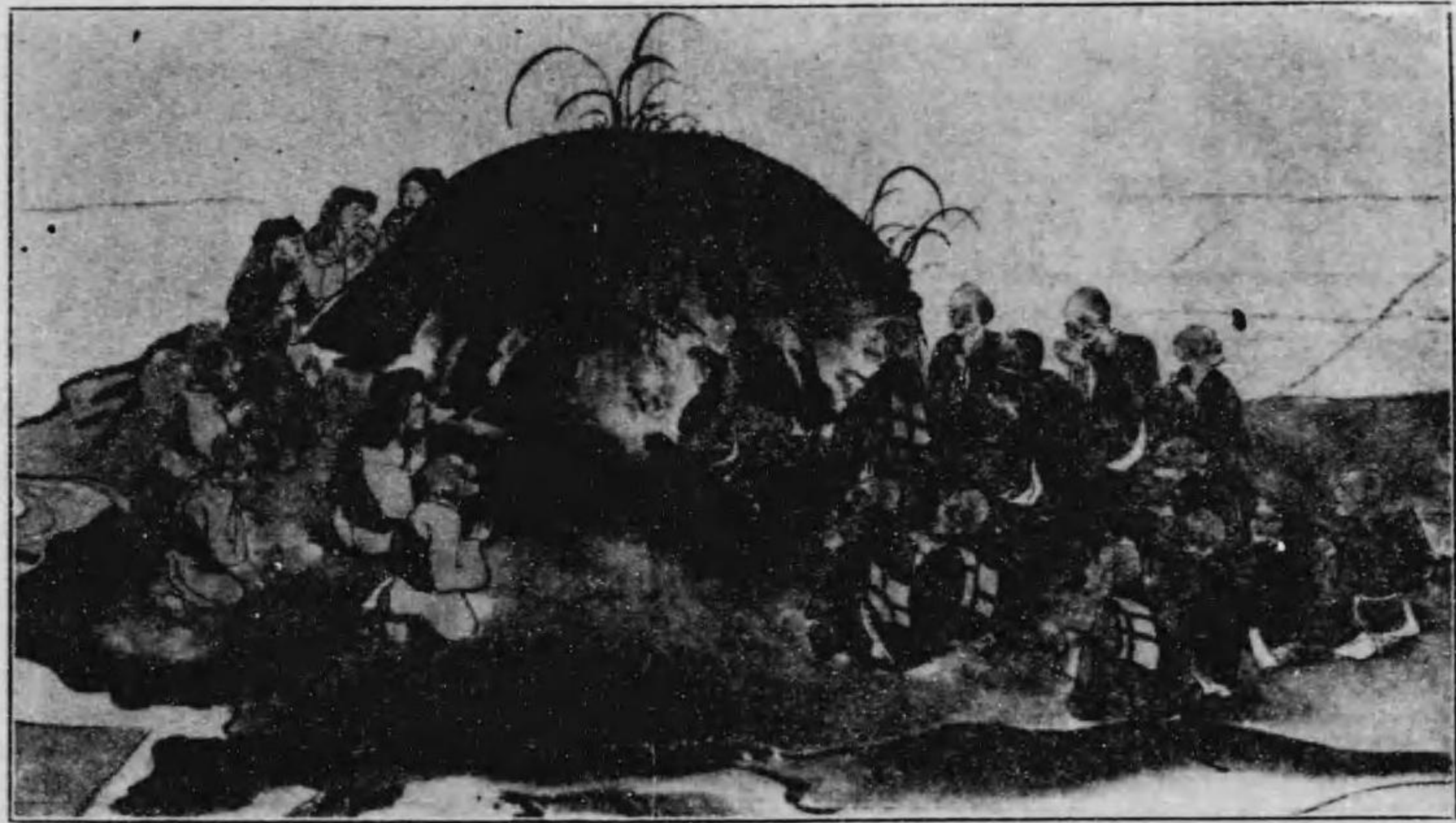
事祭の人シタスキルト



人土洲濠央中

上へ後向きに乗り、凭掛る所へ手を載せ、膝を折つてお辭儀をする。尤も是は少し坐り方が違つては居る。又濠太拉利亞の土人が、さう云ふ風に坐つた繪を、私は此處へ持て参りました。或は又、中央亞細亞邊の土人にも、日本流の坐り方をして居る繪があります。トルキスタン人は禮拜の時の外、敬意を表する時、又は食事の時は、往々日本流と同じ様に、坐はる事がある。併し是等は、前にも、申します通りに、皆一時、或る場合にのみ、限つて、坐つたもので、平常家に居る時、朝から晩まで、斯う云ふ風の坐り方をして居るのではありません。

我國に於ては、奈良朝時代に、支那の風俗が輸入された時、朝廷或は貴族が、椅子を用ゐたことがあります。併ながら、一般の民衆は、椅子を用ゐなかつた。又此の朝廷や貴族が、椅子に凭つたこと云ふ風俗も、一時のことであつて、其後の藤原時代には、全く廢れてしまつたのであります。本邦に遺つて居る所の一番古い風俗畫で、尾州徳川家にある「源氏物語繪卷物」是は藤原時代の末からして、平家頃までの、主に貴族的生活を描いたのであります。



一遍上人繪詞傳の内のり

も、其中に婦人は矢張り日本流に坐つて居るのがあります。此の時分には、部屋の中に「置き疊」を彼方此方に置いてあつたご見え、それが描いてあります。是は先年大學に展覽されました。それから又「紫式部日記繪卷物」是は私は寫しを見たのでありますが、鎌倉時代初期のものであります。其中にも坐つて居る婦人がある。併し男子は坐つて居ない。それから其次に「一遍上人繪詞傳」云ふものがあります。是も私は寫しを見たのでありますが、鎌倉時代中期及末期までの風俗畫でありまして、其中に一遍上人ごか、其他の坊さんが、日本流に坐つて

居る。尼さんも坐つて居る。併し其他の男は「アグラ」をかいて居る。是は後に繪を御覽に入れますが、僧侶の中には、私が先刻御覽に入れました「跪の二」云ふ坐り方をやつて居るものもあります。それから又、其處に群衆して居る人民の中にも、少數の者は坐つて居るが、多數は「アグラ」をかいて居る。



融通念佛緣起繪の内のり

それから、鎌倉の光觸寺に「煩燒阿彌陀緣起」云ふものがあります。是は國寶になつて居ります。私は大正四年の御大典の時、京都で見ました。是は後醍醐天皇の嘉暦年間のものであります。此の中にある坊さんは、拜む時に坐つて居ります。女は「アグラ」をかいて居ります。それから尙、春日

權現驗記」云ふものがあります。是は延慶年間の高階隆兼の筆で、御物であります。御大典の時、京都の博物館で拜見致しました。此の中には、坊さんも、俗人も、禮拜をして居る時には、坐つて居る。或は又坐つて居らずに、私が先刻申しました「跪の二」云ふ姿勢を取つて居る者もあります。其他、融



足利時代の應永年間



鎌倉時代の足利時代

れから「白拍子の女」麴賣の男「奥かつぎの男」は立膝になつて居るのが描いてあります。其他「陰陽師の男」は「跪の二」の坐位をして居ります。其他種々の

通念佛縁起繪に云ふものがあります。是は足利時代の應永年間のもので、やはり寫を博物館で見たのですが、此中には、婦人及子供には、坐つて居るのがありますが、男子は坐つて居らない。それから「七十一番職人盡歌合」是は鎌倉時代、或は其後の風俗畫でありまして、足利時代に出來たものであります。其中に、今日の日本流の坐り方をして居るものがあります。或は又女で「アグラ」をかいて居るものもあります。「紅こき女」は坐つて居りますし、「舞妓」及「タタウ紙賣の女」は「アグラ」をかいて居り、「鞆卷賣の男」が「アグラ」をかいて居ります。そ



鎌倉時代の足利時代



鎌倉時代の足利時代

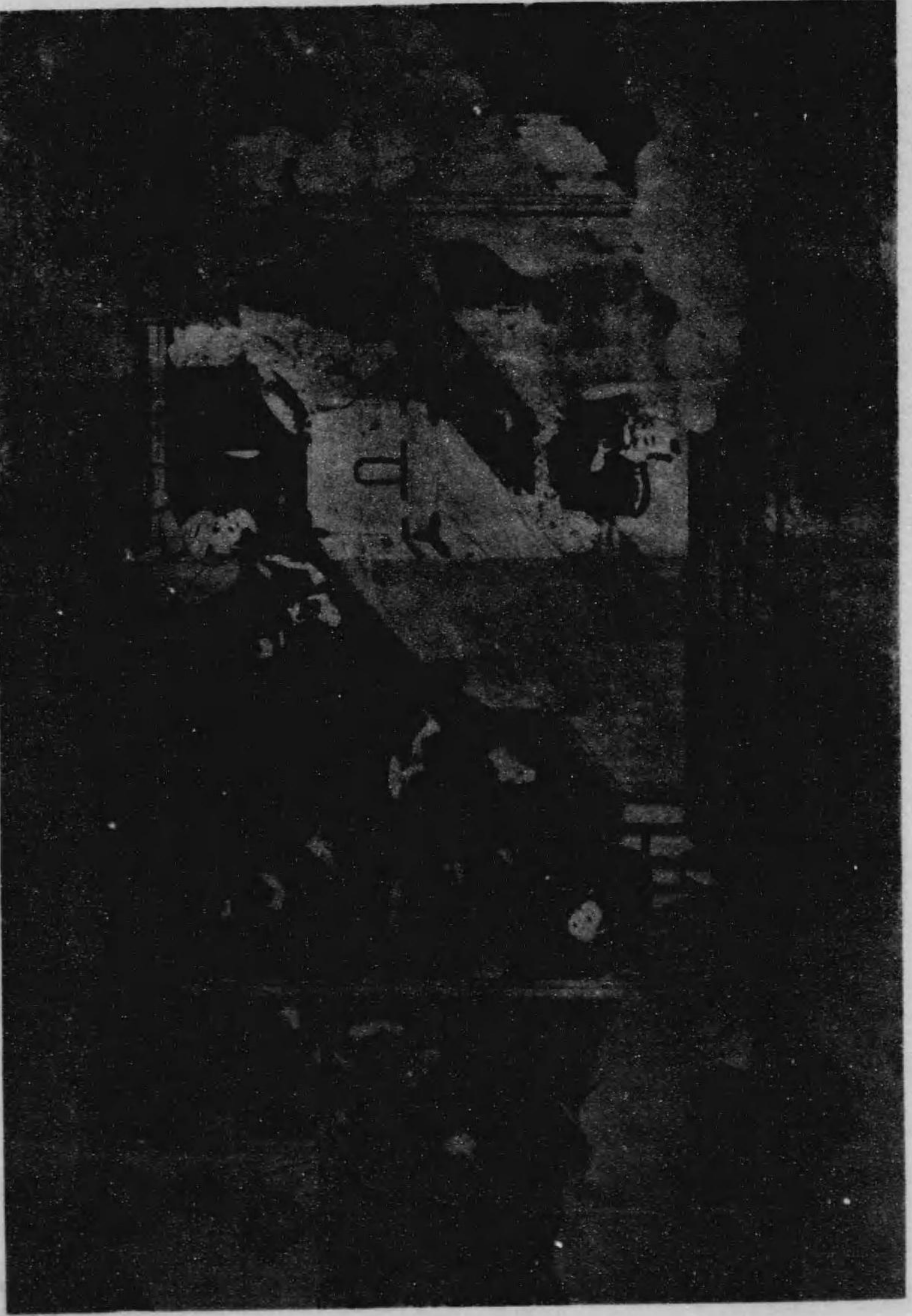
居る者があるが、男子中には、坐つて居るものがあり、又毛氈の上に立膝をして居る者もある。此繪には、女はありませんから、女の事は分らない。それ

職業の人が立膝「アグラ」又は今日の様の正しい坐り方をして居ります。それは後に御覽に入れます。

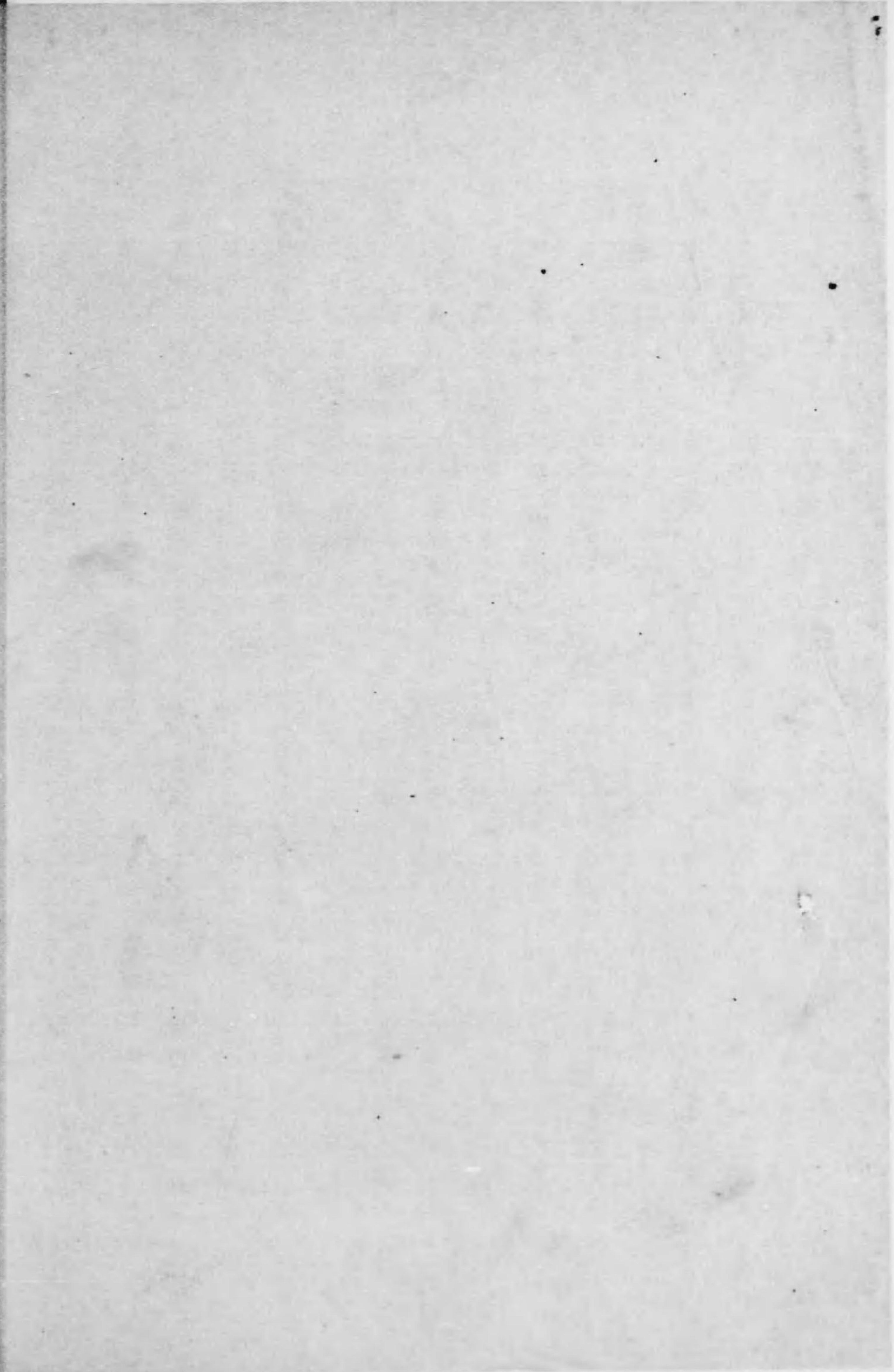
要するに、今述べました通り、此の時代に於ては、召使の女が、長上に對する時には、多く今日の如く、坐つて居つたやうに思はれます。又貴婦人と雖も、殊に禮儀を正しうする場合には、坐りました。それから、僧侶も、俗人も、男女共に、禮拜する時には、坐つたやうであります。其後徳川氏の初期の繪を見ますと、狩野山樂の「少年乗馬圖」是は博物館で見ましたのですが、此繪には、大名は曲糸に腰をかけて

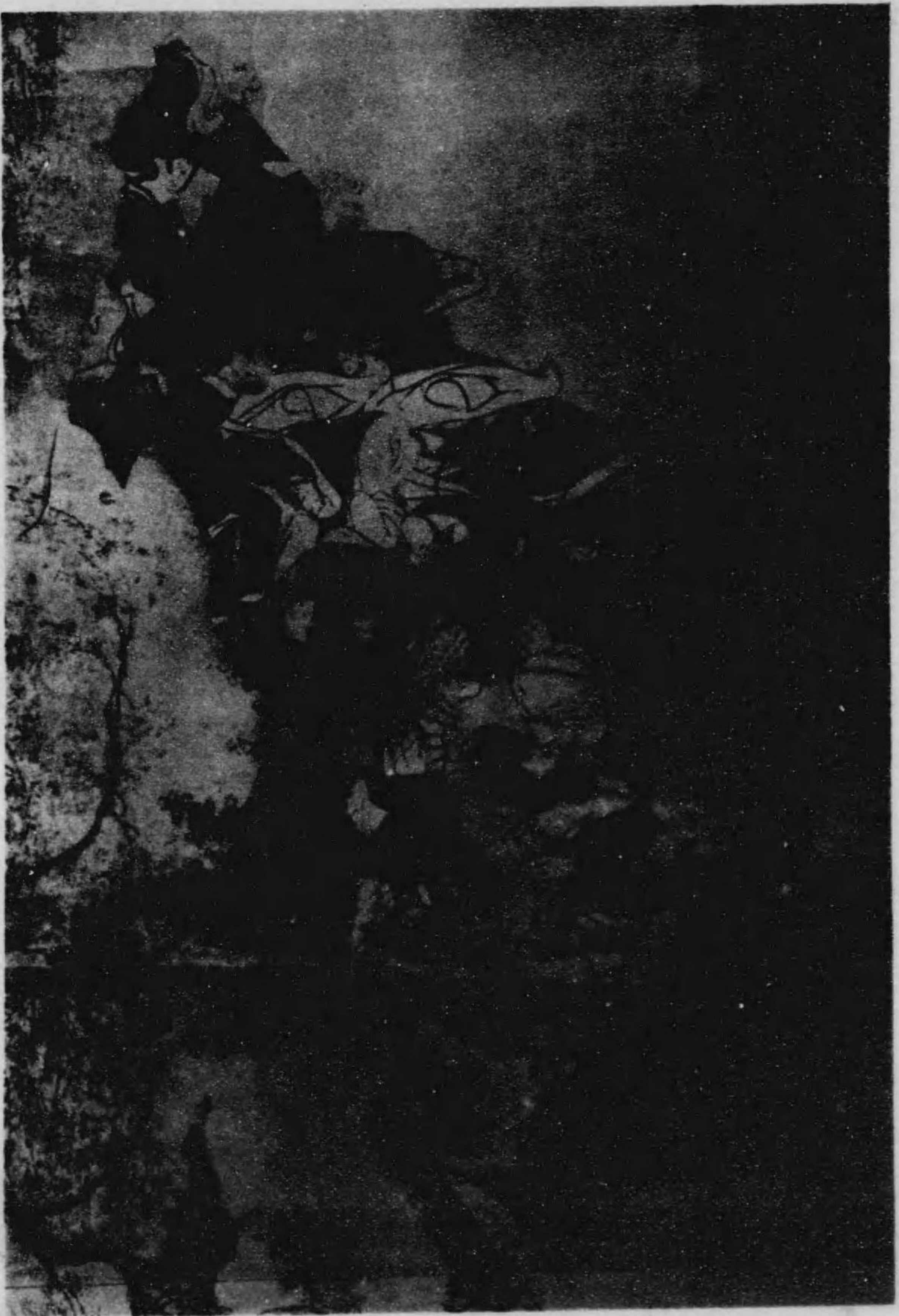
から狩野長信の「花下遊宴圖」是は慶長元和の頃の風俗で、原六郎云ふ方が持つて居られるのであります。私は其の寫を見ましたがそれには、坐り方が色々混合して居つて高貴の婦人が毛氈の上に坐つて居るものもありますし、或は腰元の女の中には「アグラ」をかいて居るものもあります。其外「彦根屏風」是も慶長元和の頃のものであります。井伊伯爵の所藏であります。それには男には坐つて居る者もあれば「アグラ」をかいて居る者もあります。女の雙六を玩んで居る者は、立膝をして居り、手紙を書いて居る女も、立膝をして居ります。又三味線を弾いて居る女は、坐つて居ります。此の時分の繪には、三味線を弾くのに「アグラ」をかいては、工合が悪いと見えて、男も女も「チャン」坐つて居ります。

其他の繪では、松浦伯の所藏の「婦女遊樂圖」是も慶長元和の頃のものです。ありますが、其中の女は坐つて居ります。それから「歌舞伎雙紙繪卷」云ふものがあります。是は尾州徳川家の藏であります。其寫を茲に帝國圖書館から借りて參つたのであります。此繪は、岩佐又兵衛の繪だ云ふ説もあ

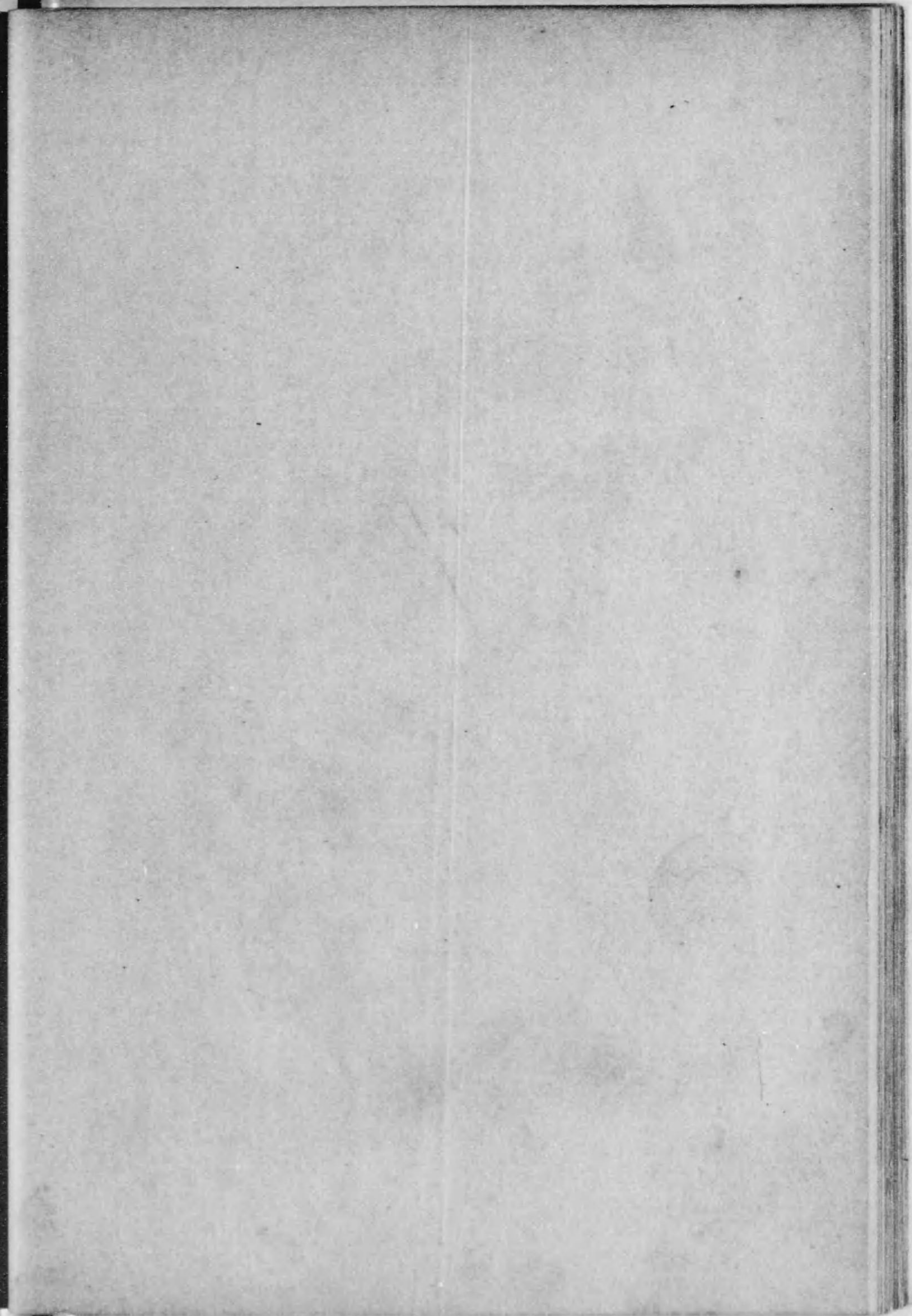


歌 舞 伎 双 紙 繪 卷





歌 舞 伎 双 紙 繪 卷



るけれども、實はさうではなくして、寛永頃の繪だと言ふことでもあります。此の中の男女は、共に立膝が多いのであります。中には「アグラ」をかいて居る者もある。囃の時、鼓を打つ人などは、坐つて居り、唄ふ人は矢張り立膝又は「アグラ」をかいて居る。飯を食べて居るのも、男女共に「アグラ」をかいて居る。又は立膝になつて居る。又給仕をする女も、立膝で給仕をして居ります。其後になりまして、菱川師宣の「角田川」延寶七年の畫であります。是には、見物人の中に、坐つて居る者もあれば、立膝の者もあります。其他菱川師宣の「妓樓圖」があります。何れにも皆立膝のものが澤山あります。私は、浮世繪畫集を工科大学から借りて來ましたけれども、大きくて持つて來られませんから、今日は持つて來ませんでした。其他宮川長春の「男女遊樂圖」は元祿享保の頃の画のものであります。九鬼隆一氏の所藏であります。是は男女共に立膝の者が多い。それから、西川祐信の筆の「男女歡娛圖」は、是も元祿享保の頃の畫であります。是も男女共に立膝の者が多い。是等の繪畫に徴しましても、徳川氏の初期に於ては、未だ今日の如く一般

に平常家に居る時に坐ることはやらなかつたやうに思はれます。然らば何時頃から一般に坐るやうになつたか云ふことを申すのは、甚だ困難でありますけれども、強ひて申し上げますれば、一般に日本人が今日の如く家居平常日本流の坐り方をするやうになつたのは、元祿享保頃からではないかと思ひます。恐らくは初めは是が都會に行はれ、段々にそれが田舎にまで波及して、男女老若共に遂に一般に今日の如く坐ることになつたのであらうかと思はれます。

それから推測しますると、此の坐る云ふ風俗は、遠くもまだ二百年を出でないのであらうと思ひます。是は或は臆断かも知れませんが、私は色々調べたものに依てさう考へるのであります。今日でも、田舎へ行くに相當の家庭の婦人でも、氣づかひの人の居ない時には、立膝をして居ります。それなごは、元祿以前の風をやつて居るのかと思ひます。又是には、一面家屋の建築様式が變つた云ふことの關係もあらうかと思ひまして、夫等も人に尋ねましたが、家屋建築の形式は、足利時代應仁の亂以後になつて、段々

變遷し、寢殿造が廢れて書院造が漸次擴がつて來た。是と同時に疊も段々家の中に廣く敷詰められることになつた。元來疊云ふのは、疊み重ねること云ふ意味で、昔からあつたものである。絹疊、菅疊、皮疊云ふ名が古事記にもある位で、今日の莫蔭さか又は薄縁のやうな物の上に人が坐つて居つた。或は寢る時にも、之を下へ敷くやうにしたのであります。唯尊敬する人が來られると、一枚では失禮だ云ふので、三枚も五枚も重ねたのである。即ち疊み重ねること云ふ意味は、其の邊から來たのかも知れぬ。又疊が寢道具に用ゐられたことも、古書にあるのであります。

今申したやうな次第でありますからして、疊は初めは家の内を、彼方此方持ち歩いたものである。自分が坐る時、疊を持つて來て坐る。お客様が來た時、疊を出す。丁度今の座蒲團のやうに、彼方此方へ持つて歩いたものであります。後には部屋の一部分に敷いて置くやうになり、それが段々多くなつて、後には部屋の一部分だけでなく、室内一面に敷く、遂に進んで、各部屋残らず敷く云ふ風に、疊が擴がつて來たものであります。殊に應仁の亂以

後には大分室内に疊が多く敷かれるやうになりましたが然し其時分にはまだ一般普通に坐つたのではなかつたのであります。既に疊は室内に多く敷かれたけれども、また一般には坐らなかつた。其後徳川時代になつて泰平が續くに從つて人間の生活が優長になり、閑雅になり、禮式がやかましくなつて、其中一方には茶の湯なども段々流行し、次第に今日のやうに老若男女ともに日常家居の時にも坐るこゝになつたのだらうかと思ひます。私が研究の結果、さう云ふ風に斷定したのであります。此處で一先刻來申しました所の繪を「エビヂアスコープ」で順次御覽に入れたいと思ひます。

(繪畫寫眞等示説)

さて只今まで申し上げました所の日本流の坐り方と云ふものは、吾々の身體に如何なる影響を及ぼして居るか云ふ問題に就て、私は聊か研究を致して見たのであります。が、ごうも是は格別の影響はない。即ち坐るこゝの爲に起る弊害は、別に大したことはないやうであります。

第一に下肢、殊に膝から下の方を、身體と云ふ重い物が載つて、壓して居る

のであるから、下肢の血の循環が、幾分か悪くなること云ふことはありますが、併し、是も一時のことであつて、精々で痺れが切れる位の話、病人でない以上健康な人なら格別後に害を残すやうなことはありません。



第二に、一體に、下肢の形状が少し悪くなる。後に畫で、御覽に入れますが、西洋人にはX^字状になつた脚が多いが、日本人にはO^字状になつた脚が多い。現に有名なるウィルヒヨールの子息のハンス、ウィルヒヨール云ふ人が、日本人の、長く坐つて居つた人の死體の膝を取つて、研究した結果に依る、何も別段變化は無かつたこと云ふことであります。

あります。尙ほ足立文太郎君其他の人々も、脚の色々な關節や、骨などを研究されましたけれども、長く坐つて居た爲に、少し位の變化はあります。即ち全く無いことはありませんが、大した變化はありません。まだ十分研究



(甲)人老の本日

(乙)人老の本日

(丙)人老の本日

の積んで居ない點もありますが、兎に角變化があるにした所で不具になる程の變化はない。行儀良く長く坐つて居た人では、先づ足の骨の形に少し變化が起るか、坐胼^{ざへん}胼^だが出来るか云ふ位なものであります。

第三に、日本人の姿勢が甚だ悪く、殊に猫背が多い。是は確に坐つて居る影響と思ひます。是は公平に批評するに餘り良い姿ではありません。それから永年背中の筋肉を過度に勞するが爲に、年を取ると、腰が弓の如く曲る。即ち下部の胸椎に、高度の龜背が起る。外を歩いて見ると、上半身を前方に甚しく屈め、殆

ご九十度の直角で、歩いて居るやうなお爺さん、お婆さんを見掛けるが、是は坐ることのない西洋には殆どありません。

第四に、日本人に痔核が多い。此事は嘗て私は研究したことがありまして、東京醫學會雜誌に書いてあります。是も坐る爲めの一の弊害かと思ひます。但しそれは醫學の方のことに互りますから、此處では申述べません。第五に、多少無精になる。坐つたきり動かないから、自分の近所にある物も、手を拍^たいて、人を呼んで取らせること云ふ風で、甚だ動作が不活潑になる。それが爲め、多少衛生上害があるかも知れませんが、併し衛生上の害などはさう大したことはないから、寧ろ是は事務を執るに不便の爲め、經濟上の害の方が多しと言ふても宜しからうと思ひます。

之を要するに、坐つたが爲に、別に大した害はありません。それが爲に、壽命が短くなることか虚弱になることか、不具になることか云ふやうなこともないやうであります。それでは何か利益があることか云ふは、是には猶ほ取立てて言ふべきことはありません。足の關節の屈伸範圍が、西洋人より少し廣

いごでも申しますか、先達新聞に書いてありました、日本人がカリフォルニアで歓迎される理由は色々あるけれども、苺を摘むのに、日本人は蹲むことが上手だから、苺摘みは日本人に限ると云ふことさうです。亞米利加へ移住した時には、一の利益となるか知れませんが、其他には、坐つた爲に、別に利益はないやうに思はれます。坐ることの效能も甚だ心細い。

要するに利害ごもに大したことはない。坐りたければ坐つて居ても、別に差支はありません。併し世間には、随分俗説があつて、日本人が西洋人に比して、身の丈が低いのは、是は坐つて居るからだご申す人がありますが、是は甚だしき間違ひであります。身の丈の低いのは、是は人種特有の關係であつて、別段坐つたが爲ではありません。長い間、何代もくゞ續いて與へた變化は、或は子孫に遺傳しないごも言はれませんが、僅か二百年や三百年位、坐つて居つた所で、それで人間の脚が短くなつてしまふご云ふ様なご事は決してない。而も歩く時は、脚を眞直にして歩くと、一晝夜の三分の一は寝て居るし、坐つて居る時間は、餘程お行儀の良い人でも、左程長時間で

はありませんから、それ位のことで、子孫の脚が短くなるご云ふご事はありません。現に亞弗利加の土人には非常に脚の長い黑人アフリカネーゲル(身長平均百七十センチメートル)もあり、又身體の甚矮小で、脚の頗る短いブツシユマン種族(身長平均百四十センチメートル)もある。是は孰れも人種固有の特徴であつて、決して坐ると否ごに關係は無い。是等の亞弗利加土人は、孰れも少しも坐りません。一體同一の人種中、即ち同じ日本人の中でも、他の人ご比べるご、身の丈の高い人間は、胴の割合に比して脚が長く、身の丈の低い人は、脚が短いものであります。又人種ご人種ご比べても、身の丈の高い人種は、脚が長く、身の丈の低い人種は、脚が短いものである。そこで日本人の脚が短いのは、坐つて居る爲であるご云ふのは、根據の無い俗説であります。

序に、今一つ、俗説を駁撃して見ませう。其俗説ごは、近年學校で、子供が椅子に腰を掛けて居るので、急に身の丈が高くなつた。現に家の娘は、母親よりも身の丈が高いご云ふやうなご事を申しますが、是亦何等理由のないご

こであつて、是も學校で椅子に腰を掛け出したのは、明治五六年頃からで、未だ五十年を経ちません。まだ精々二代位であります。さうして、是も家へ歸つて來れば、チャンと行儀よく日本流の坐り方をやつて居るから、さう云ふ筈はありません。併し事實に於て近年日本人の身長が増して來た。云ふことは動かすべからざる事で、陸軍の壯丁検査の表で明瞭であります。

陸軍壯丁検査表

千人中	五尺四寸以上	五尺未満
明治三十年ヨリ	一二九、五四	一五八、五二
明治四十三年迄	一五五、九七	一三〇、九六
明治四十四年ヨリ	一六六、六一	一二〇、七一
大正三年	一七一、七四	一一八、三〇

明治三十年から大正三年まで、十八年間に於て、日本の壯丁の身長が増したことは著しいもので、壯丁千人の中五尺四寸以上の者が、三十年から三十

六年までには一二九五四人であつたのに、明治四十年から四十三年までの間には、一五五九七人に増加し、明治四十四年から大正二年までの間には、一六六六一人となつて居る。更に大正三年には、尙ほ増して一七一七四人と云ふやうに増加して居る。僅か十八年の間に一二九五四人から一七一七四人と云ふやうに、身長の高くなる者が多くなつた。之に反して、五尺未満の者は、段々減つて來まして、同じ年限の間に一五八五二人、一三〇九六人、一〇七一人、一一八三〇人、斯う云ふ風の成績になつて居ります。是は頗る驚くべき變化であつて、何か理由がなければなりません。是は、まだ其理由は分りません。

それで、日本以外はどうかと云ふと、歐羅巴諸國に於ては、壯丁検査に際して、是は日本よりは尙ほ長く、詳しく調べて居りますが、其の成績はどうかと云ふと、矢張近年になつて、身長の高い者が多くなつて居ります。獨逸、奧地利、匈牙利、伊太利、露西亞、瑞西、和蘭、丁抹、諾威等の諸國は、近年になつて壯丁の身長が著しく増して居る。即ち身長の高い人間が多くなつて、身長の高い

人間が減つて居ると云ふことであります。唯佛蘭西と白耳義だけは例外であります。尙ほ國に依つては、壯丁検査の際に身長ばかり量らずに、體量も測つて居る所がある。其體量を計つて居る國の統計を見ますと、是は増して居らない。即ち身長は高くなつて居るけれども、體量は少しも殖えて居らないと云ふのであります。そこで、日本人は、今申すやうに、身長は高くなつて來たが、體量はどうかと申しますと、日本では壯丁検査の際、ツイ近頃體量を計り始めたのでありますから、是はまだ他の國と比較して、澤山の數を擧げて御話する程になつて居りません。けれども大體は、各國と同じく、體量が殖えずに、身長だけ伸びて居るのかも知れません。兎に角、身長が増加したことは事實である。併し、其理由は能く分らない。分らないから強ひて説明はしない方が宜い。即ち、近年日本人の風俗が變化して、洋服を着けたり、牛肉を食つたり、椅子に腰を掛けたり、體操を少しばかりしたと云ふ位で、それが爲に身長が伸びたとは言はれない。

抑も一國の人民の風俗と云ふものは、之を一朝にして改むることは、むづ

かしいことである。幾ら政府が法律を出さうが、新聞に書かうが、誰れが演説をしやうが、永年の風俗習慣を改むることは、中々容易なことではない。然し又其反對に、今日の風俗を、何時までも此儘保持しやうと思つても、それも出來ない。國粹保存論者は、頻りに古い風俗を存して置かうとして居るけれども、是亦其通りに行くものではない。之を阻まんとしても、阻むことが出來ません。私自身は、甚だ行儀が悪くして、坐ることが、大嫌だから、之を廢さうと云ふのではない。又坐ることが甚だしく悪いと云ふのでもない。但此日本流の坐り方と云ふものは、甚不自然であることは、争はれない。然し、決して私は、坐るのを急に廢さうとして、今日の此演説をしたのでは、ありません。唯、日本人が坐り始めたのは、さう古くないと云ふこと、事實を申し上げたまで、あります。

實は、是は私が永年心掛けて、調べて居たのですけれども、餘暇に少しづつやつた迄で、餘り勉強しなかつたので、漸く今日に至つて、これだけのことを申上げるに止まるのであります。尙ほ今から、百年か二百年の後になること、

今の坐り方がどう變るか分らない。今日私の申げたやうな坐り方は、昔話になつてしまつて、明治、大正の時代には疊の上に坐つて居つた、而も洋服を着てまで坐つて居つたこと云ふことが、繪などで示されるやうなことになるかも知れません。さう云ふことは分りませんが、兎に角坐り方には、家屋の建築とか、衣服に變化とかが大に關係しますから、今より將來のことを豫測することは、出来ないものでありますけれども、恐くは今日の坐り方は廢つて、一部の人には椅子にかけ、他の部分の人は「アグラ」をかくことになるだらうと思はれます。

此調査を致しますに就きまして、多數の諸君の御教示を辱うしました。先づ第一に今泉雄作氏、それから伊東、小金井、塚本、服部の諸博士、益田孝氏、鶴田陸軍々醫總監、帝室博物館の溝口禎二郎氏、帝國圖書館の吉原開氏等であります。特に田代博士には多年御蒐めになりました有益の繪畫を多數御用立て下さつて、非常に利益を得ました。爰に皆さんに厚く御禮申上げます。(完)

附記

本篇が、史學雜誌第三十一編第八號に出た後に、諸方から種々有益なる助言を賜はりたることを感謝致します。

(一)雜誌「歴史地理」第參拾六卷第四號に於て、赤堀又次郎氏が「行住坐臥及び拜」を題したる一篇を掲げられて、予に注意を與へられたることは、深く謝します。且予の所説の骨子に對しては、氏も亦贊成を表せられたるは、予の最も欣快とする所であります。

(二)中村勝麻呂氏から、其新著「眞面目の人井伊大老」を惠贈せられました。其内に坐り方に關する項がありますから、左に摘録します。

例へば、能で、脇師が名乗りを上げ、道行の謠を謠つて落ち着く時に、片膝立てゝ坐る。あの姿は、佛教で云ふ所の「胡跪」である。胡跪は「互跪」も書く。胡跪は、本當は、右膝を、右の脚指を、左の脚指を地に着け、腰を浮して居る姿で、儀式中に、假に休息して、次の所作を待つて居る時、又は香を焼く時などの姿である。併し脇師の坐るやうに、腰を下ろすことも

ある。さうして両手は脇師のやうに、立てた膝の上に置く。之に對して「長跪」と云ふがある。此は兩膝と兩脚の指を地に着け、腰を浮かして居る姿で、釋尊が尼僧は體が弱く、長く胡跪をして居るに堪へないから、特に尼僧に許された姿である。長跪も能の所作中に在る、云々。

(三) 鷲尾順敬氏の云はるゝには坐位の今日の如くになつたことは、佛敎との關係も必ずあつたことゝ思はれる。慈覺大師は、始めて日本に「常坐三昧」の法を傳へられたのである。彼の京都の大原の三千院の勢至菩薩や觀音菩薩の坐像の如きも、皆此の坐法に従つたものである云々。

(四) 人類學教室の大野雲外氏から、古代の日本人が「アグラ」をかいて居つた、唯一の埴輪土偶の畫像を惠贈されたから、それを木版にして本文第一〇頁に挿入しました。是は現に常陸の行方地方に祀られて居るもので、奈良朝以前のものであると云ふ。

(五) 服部宇之吉博士の著「支那研究」の附録に、次の文字のあることを後に氣付きたる故に之を左に摘録する。

古は後世と異にして席に坐するところがある。後世は椅子などに坐するのみで、地に席して坐するところ云ふことは無い。唯々拜を爲す場合に、坐蒲團の如きものを敷きて、其上に跪いて拜するところがある。古は客に遇ふ時などは、普通立つて居るので、飲食講論などになるに坐する。坐と云ふのは、兩膝を折りて、脛を地に著け、蹠を臀に著けるので、吾人が今日坐するのと同じである。別に危坐又は跪坐と云ふのがある。此れは、兩膝を折りて脛を地に著けるが、臀は蹠に著かない故に、脛は地に著いて居るが、膝より上は、立つて居るのである。箕踞と云ふのは又別で、それは臀は地に著け、兩脚を稍々開きて伸ばすのである。踞、箕踞は無作法のものなるは、いふまでも無い。後世は椅子などに坐するのが普通で、古所謂坐は無い。

(六) 大正九年十二月刊行、日本社會學院年報第八年第一、二合冊に秋葉隆氏の「坐俗の研究」と題した長篇がある。著者は椅子に凭る坐法を、立俗又は立式生活と名け、椅子を用ゐない坐法を、坐俗又は坐式生活と名け、世界の

各人種を立俗のものゝ、坐俗のものゝに分類した。而して本邦では、昔よりして、坐俗であつた。即ち日本人は、椅子を用ゐざりし人種であつたこと云ふことに結論した。然し日本人が、昔から、如何なる種類の坐法を取つて居つたか云ふことに就ては、毫も説く所が無い。



如意輪觀世音菩薩半跏像 天平時代 奈良博物館藏



像尊釋院內塔大耶伽陀佛 (坐 跏 結)



體神社神師穴泉和



(跏半)像士居摩維 藏館物博其奈 來將土唐傳寺



(膝立左)像后皇功神 藏館物博其奈 期前代時原藤



(座樂)像命姬仲 藏館物博其奈 期前代時原藤



男 鮮 朝
ラ グ ア



男 鮮 朝
ミ ガ ヤ シ



男 鮮 朝
リ ハ ス



女 鮮 朝
ラ グ ア



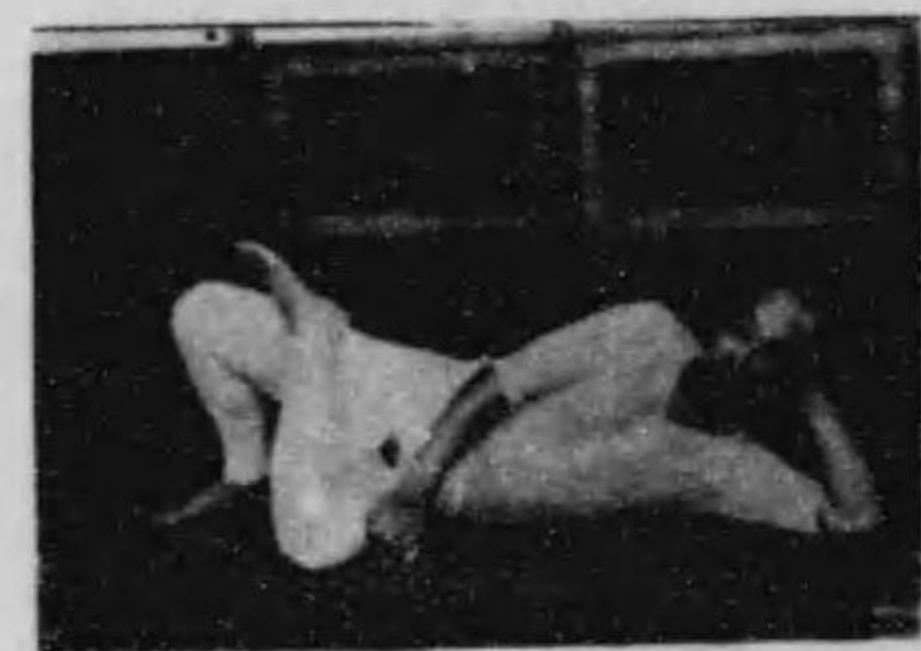
女 鮮 朝
ミ ガ ヤ シ



女 鮮 朝
リ ハ ス



女 鮮 朝
リ ベ ソ ネ



男 鮮 朝
リ ベ ソ ネ

(一第) 方 り 坐 の 人 鮮 朝



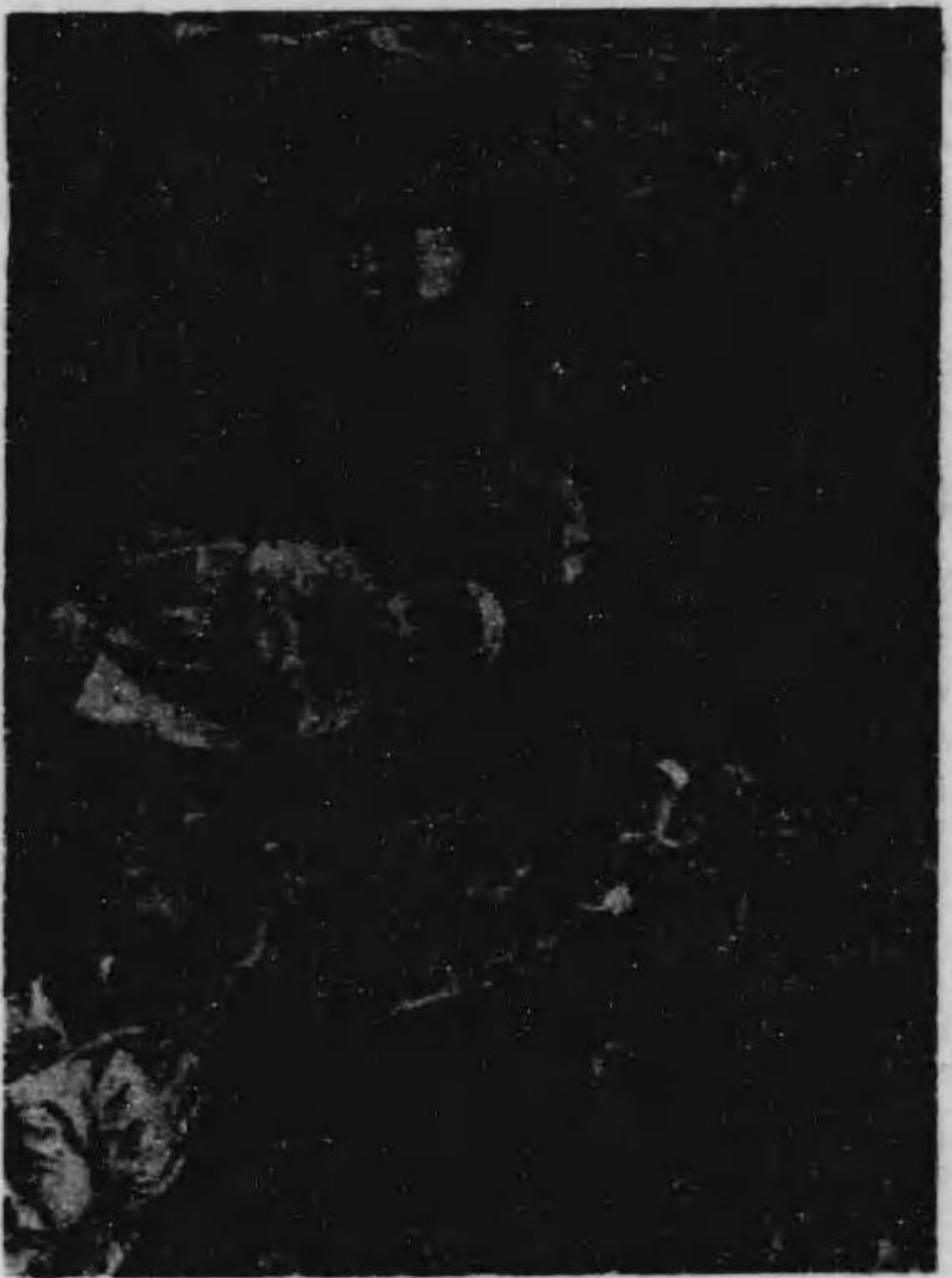
樂 奏



事 食



屋 小 寺
(二第) 方 り 坐 の 人 鮮 朝



小 亞 細 亞 の 小 兒



イ コ ル の 貴 婦 人



ア ラ ビ ア の 學 校



ト ル コ の 風 俗



(甲) 人々



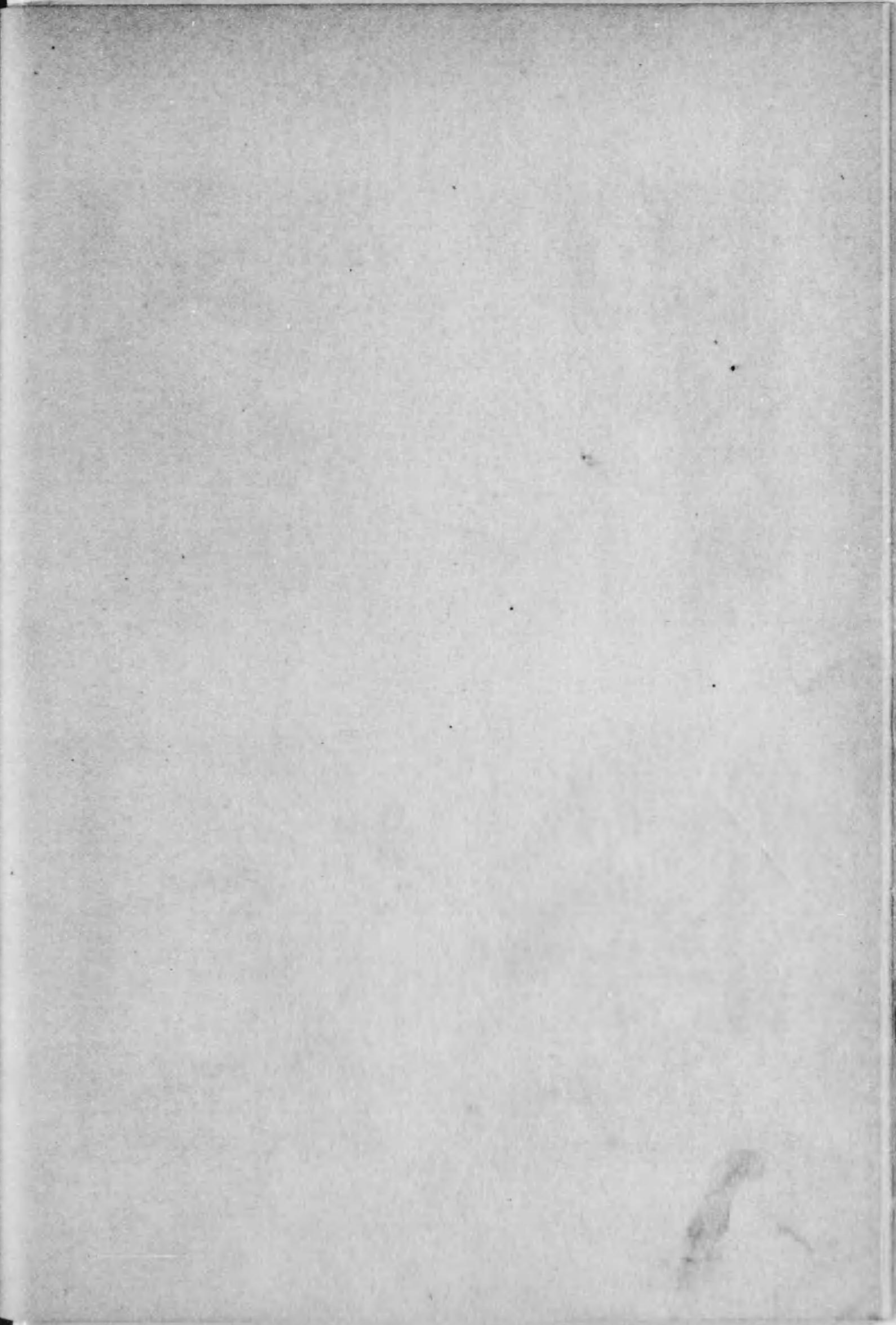
(子男) 人々

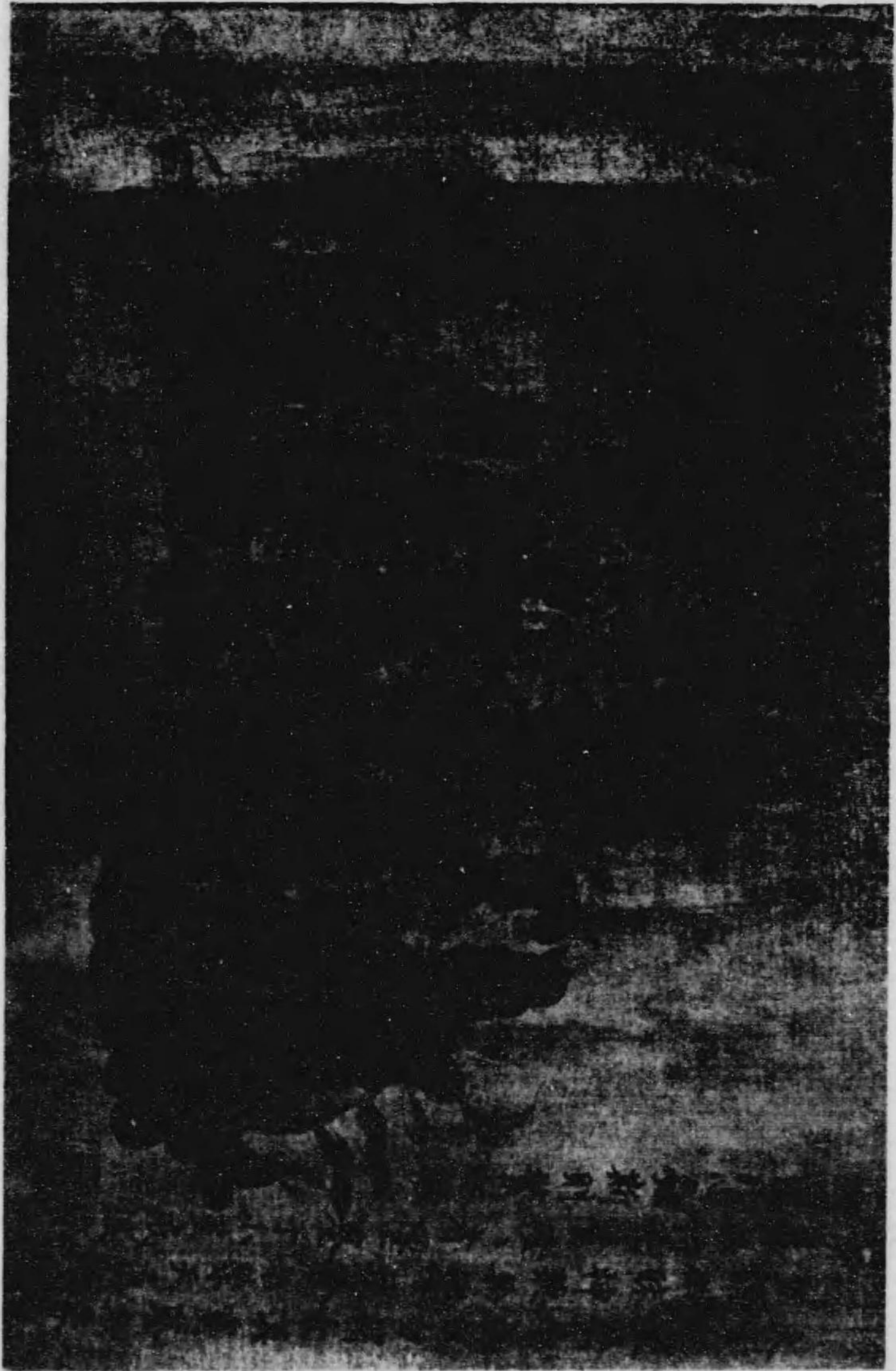


(乙) 人々

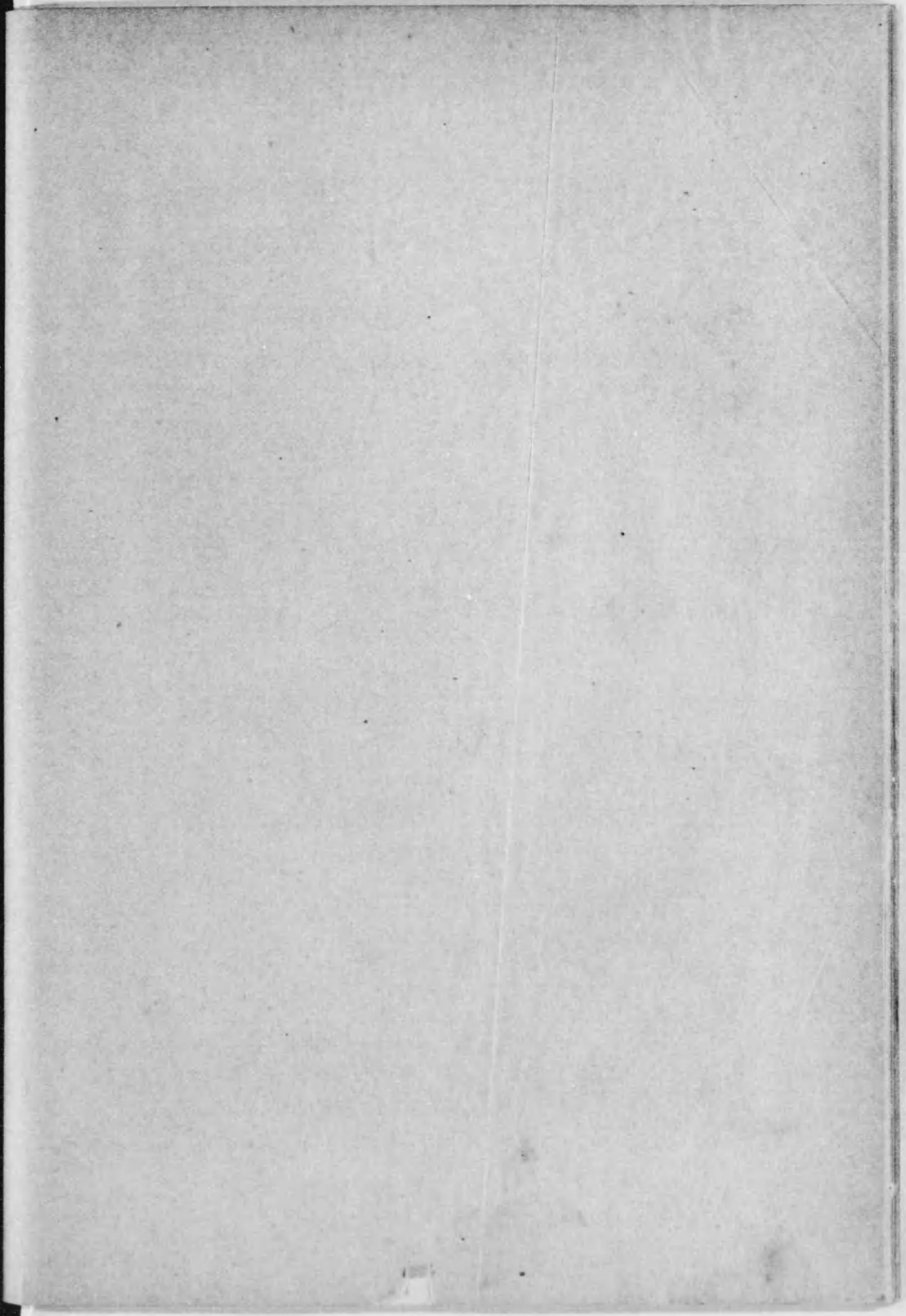


(子女) 人々



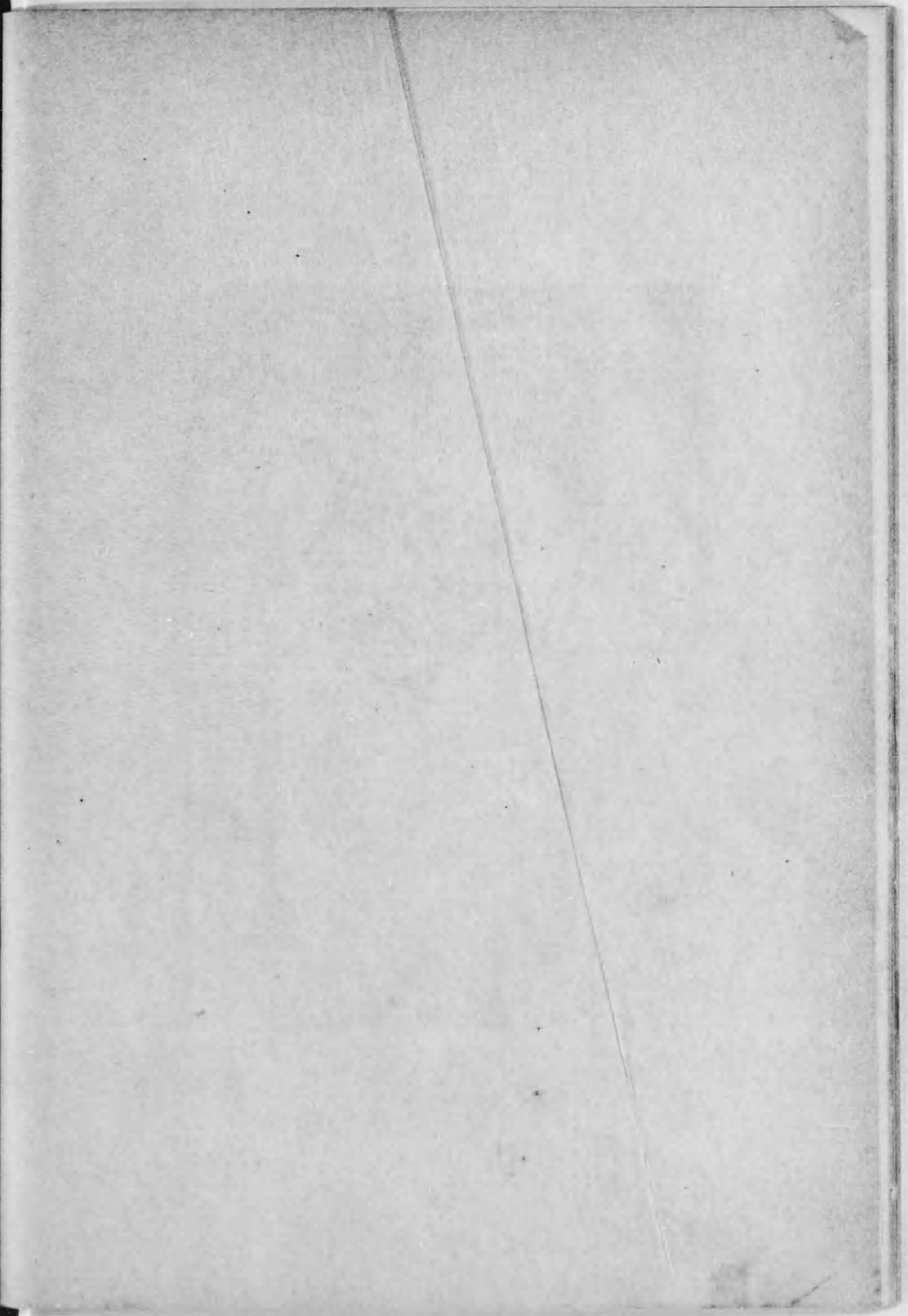


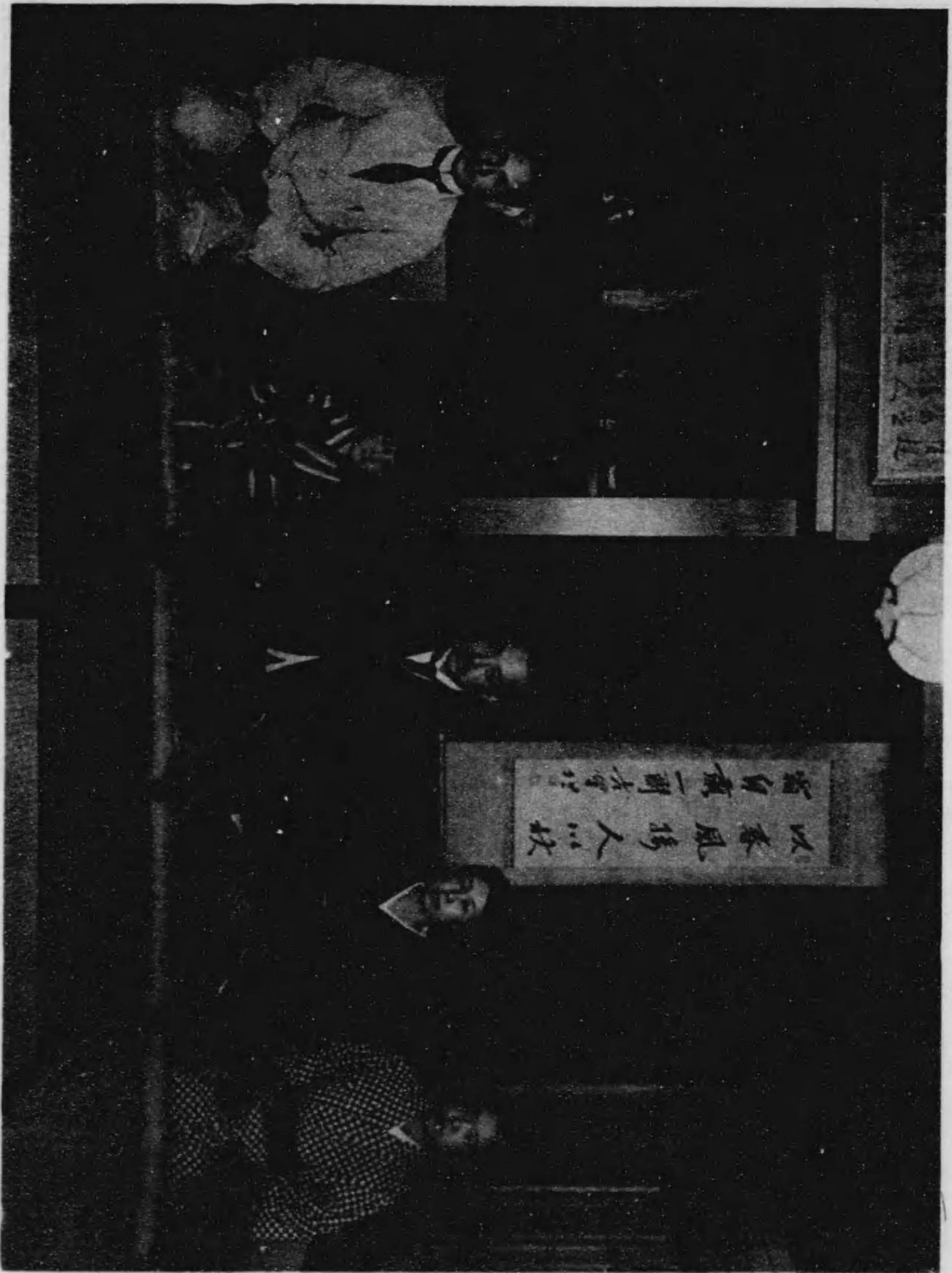
順 愷 之 大 英 女 物 史 館 所 藏 內





風俗屏風 (慶長年間) のもの
米國ボスマン博物館蔵





日 本 人 家 庭 中 坐 方

大正十年四月六日印刷
大正十年四月九日發行

定價金壹圓五拾錢

不許複製

著者兼發行者
入澤達吉

東京市本郷區金助町一番

印刷者
柴山則常

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印刷所
合資會社 杏林舍

東京市本郷區駒込林町百七十二番地

電話小石川(七七九
四七二五)

發賣所

東京市本郷區本富士町二番地(電話下谷
振替口座東京二七九八一番)五五一

克誠堂書店

終